

## 論文内容要旨

論文題名：肩関節機能の加齢による影響と性差の X 線学的検討

専攻領域名：運動障害リハビリテーション領域

氏名：尾崎尚代

### 内容要旨

#### <目的>

われわれ理学療法士は、肩関節疾患患者のリハビリテーションを実施する際に、肩関節機能再獲得の指標として肩甲骨上腕リズムに着目することが多い。肩甲骨上腕リズムに関しては 1934 年に Codman が報告し、1944 年に Inman が 2:1 と報告して以来、70 年以上過ぎた現在でも通説となっている。肩甲骨上腕リズムは、その計測方法の進歩に伴い、様々な報告がされてきているが、年齢や男女を比較した報告は渉猟した限りでは見当たらない。そこで、肩関節疾患症例を治療するうえで医師や理学療法士が臨床上で実施している徒手抵抗テストと同肢位で撮影されたレントゲン像を用いて、肩関節機能の加齢による影響と性差を明らかにすることを目的とした。

#### <方法>

昭和大学藤が丘リハビリテーション病院スポーツ整形外科を受診した症例のうち、取り込み基準と除外基準を満たす 506 名（女性 265 名、年齢 15～84 歳、男性 241 名、年齢 15～83 歳）の非障害側を対象とし、青年期群（A 群；男性 58 名、女性 13 名）・壮年期群（B；男性 43 名、女性 27 名）・中年期群（C；男性 93 名、女性 142 名）・高年期群（D；男性 47 名、女性 83 名）の 4 群に分類した。Scapula-45 撮影法によるレントゲン像を用い、腱板機能と肩甲骨機能、肩甲骨面上 45 度拳上位での肩甲骨と上腕骨の運動比（45 度 SH 比）および下垂位から肩甲骨面上 45 度拳上位までの肩甲骨の運動変化量について、加齢による影響と性差を有意水準 5%未満にて検討した。

#### <結果>

腱板機能については、加齢変化と性差は有意ではなかった。また、肩甲骨機能については、男性の C 群は A 群よりも有意に肩甲骨の上方回旋機能が減少しており、D 群では女性が男性よりも優位に肩甲骨の上方回旋機能が減少していた。45 度 SH 比は、A 群以外で女性は男性よりも肩甲骨に対する上腕骨の運動比率が大きく、特に C 群で著明だった。また、肩甲骨の運動変化量に着目すると、女性は B 群が他の 3 群よりも下垂位から肩甲骨面上 45 度までの肩甲骨の運動量が小さくなり、男性は C 群が A 群、D 群よりも小さくなっていた。